戦前（1930年前後）の食生活において果菜類はカボチャが主役でありトマトは導入期にあった

ー「聞き書・日本の食生活全集」の数量化による解析　ー

本　間　伸　夫　　立　山　千　草

聞き書・日本の食生活全集[1]の既述内容を数量化する試みを生鮮肉類・イモ類・果物の消費状況の解析に応用した結果を前報[2][3][4]にて報告し、その中で、いわゆる戦前の食生活において生鮮肉では鶏肉、イモ類では里芋、果物では柿が主役であったことを認めた。本報では、その手法を果菜類に適用し、当時導入期にあったトマトが今日ではトップの座を占めているなど、食生活上大きな転換が起きていることを数量的に確認できたので報告する。

方　法

1．分析方法

1）　分析の対象とする資料

1930年前後の食生活を聞き取って記録した聞き書・日本の食生活全集（以下、聞き書）の都道府県版47巻、CD版、索引版２巻を対象とした。加えて、2014、2017、2019年調査の家計調査の２人以上世帯あたりの主要果菜類への支出金額と購入数量の値[5]を約１世紀を隔てた新旧比較の資料とした。

2）　語彙の検索と分類

果菜類それぞれの名称を、別名も含めて、聞き書の記述について検索し、調査地点、入手方法と利用形態などを集録した。新旧の比較のため、家計調査に合わせて、カボチャ・ナス・キュウリ・トマトを対象にして検索した。なお、果菜の呼称は紛れを避けるため、カタカナと漢字を用いた。

3）　聞き書からの検出で得られる数値

以下の数値の内容は、いずれも前報[2]に準じている。検出地点数とは、別称も含めた果菜の名称を聞き書から検出することができた調査地点の数である。検出地点比とは、都道府県ごとに得られた検出地点数を各都道府県に割り当てられている調査地点数で割った値である。この値は、地域の食生活とその食材である果物との関わりの程度を都道府県単位で表しているものとして、考察と統計分析に用いた。なお、調査地点数の全国合計値は296である。

4）　東西の地域性

既報に準じて、代表的な地域性として東西を取り上げ、中部地方以東を東日本、近畿地方以西を西日本とした。なお、自然環境を絡めた考察の場合、東北から南西へと弧状に分布する日本列島の東部が北に、西部が南に位置していることから、相対的に東日本は冷涼、西日本は温暖であるものとした。なお、地域性の東西間の差異の有無をもって、調査事象の国内での分布が均一であるか否かを判断の拠り所の一つとした。

結果および考察

1．聞き書における果菜類の検出

表１に示されている検出地点数合計922は、既報の食肉類474[2]をこえていて、イモ類1011[3]と果実類の1217[4]には及ばないもののかなりの値である。その上、果菜類には取り上げた主要４種の他に莢豆（さやまめ）類、ピーマン類、キュウリ以外の瓜類などを含むので、実際にはさらに増えるものと考えられることから、いわゆる戦前の食生活では果菜類の消費がかなり活発であったものと推定される。

検出地点比の平均値は、果菜ごとの各都道府県当たりの検出地点比を表している。例えば、最高値であるナスの0.989は１に近い値であるので、調査地点のほぼすべてで検出されることを示している。

カボチャ、ナス、キュウリの３者がほぼ同じ高いレベルの検出比であることと、東西の地域性が認められないことから、約１世紀前においては食材として国内均一に主要な地位にあることが認められる。トマトの検出比の低い値は導入期にあることを示している。

表１　主要果菜の検出地点と東西比較

果菜種類	検出地点数	検出地点数平均値	検出地点比平均値	検出地点比割合%	検出地点比東西比較
カボチャ	284	6.043	0.959	30.85	東＝西
ナス	293	6.234	0.989	31.72	東＝西
キュウリ	292	6.213	0.987	31.66	東＝西
トマト	53	1.128	0.180	5.78	東＝西
合計	922				

注　東西比較の列にある記号はすべて、P=０.05でもって、＞は東日本がより大＜は西日本がより大＝は有意の差異が認められないこと、を示している。この注は以下の表にも適用する。

ほんま　のぶお　　〒950-0813　新潟市東区大形本町2-3-28（自宅）
たてやま　ちぐさ　〒950-0813　新潟市東区海老ケ瀬471　新潟県立大学

2．戦前における主要果菜の入手法

果菜の入手法として自然産物の採取はほとんどありえないので、栽培によるものと、主に購入によるものとに大別できるものとして、表２に栽培関連の値を示した。それぞれの果菜が検出される地点のほとんどにおいて栽培されており、その検出数は少ないもののトマトが検出される地点においても、他の果菜同様に高い比率で栽培されている。

表２　聞き書・主要果菜の入手法

果菜種類	栽培地点数	栽培地点数平均値	栽培地点比平均値	栽培地点比割合％	東西比較	栽培率％
カボチャ	262	5.574	0.899	30.3	＝	92.24
ナス	281	5.979	0.958	32.2	＝	95.91
キュウリ	277	5.213	0.944	31.87	＝	83.90
トマト	50	1.064	0.172	5.72	＝	94.33

注：栽培率％＝栽培地点数×100/検出地点数

3．戦前における主要果菜類の料理などの用途

果菜類の大部分は日常の食生活の“おかず”に供されるものであるので、多様な料理に用いられる。各果菜の用途を表３に、用途の特徴的なケースを表４にまとめて示した。

全体として、用途は加熱用・非加熱用・生食用に分類される。カボチャは主に加熱用に、キュウリは非加熱用に、ナスは両者の中間にあって広範囲に供されている。トマトは例数が少ないが、ほとんどが生食用であった。

（1）カボチャ

加熱調理が大部分であって直接の生食はなく、漬物の材料は未熟物である。組織が緻密で煮崩れが少ないこと、味わい良好で栄養成分に富むことから、“かて”用に重宝されており、東西の区別なく全国的に広く用いられている。

また、アズキとの相性が良くて小豆煮に、保存との関係もあって冬至南瓜に用いられているが、ともに東日本に多い食文化であることが認められる。

（2）ナス

最多に検出される果菜で用途が非常に広いのが特徴であり、一般的な調理の他に漬物になるものが多い。なめ味噌の一種金山寺みそには必ずと言ってよいほどナスが入っている。例数は多くないが、冬期野菜用に、全国的に干しナスが作られている。盆には煮物などの食用の他に飾り物になっているケースが多い。

表３　聞き書・戦前における主要果菜の用途―料理―

	果菜種類	汁物	煮物	蒸物	焼物	揚物	和物	漬物	生食	他	合計果菜間 計	合計果菜間 比率％
全国検出地点数	カボチャ	128	259	10	7	27	9	12	0	6	458	20.50
	ナス	237	173	40	130	30	120	267	0	7	1004	44.94
	キュウリ	59	0	0	0	0	416	213	58	5	751	33.62
	トマト	0	0	0	0	0	0	0	18	3	21	0.94
	計	424	432	50	137	57	545	492	76	21	2234	
合計料理間比率％	果菜種類	19.0	19.3	2.2	6.1	2.55	24.4	22.0	3.4	0.94		
各果菜間比率％	カボチャ	30.2	60.0	20.0	5.1	47.4	1.7	2.4	0	28.6		
	ナス	55.9	40.1	80.0	94.9	52.6	22.0	54.3	0	33.3		
	キュウリ	13.9	0	0	0	0	76.3	43.3	76.3	23.8		
	トマト	0	0	0	0	0	0	0	23.7	14.3		
各料理間比率％	カボチャ	28.0	56.6	2.2	1.5	5.89	2.0	2.6	0	1.31		
	ナス	23.6	17.2	4.0	13.0	3.0	12.0	26.6	0	0.7		
	キュウリ	7.9	0	0	0	0	55.4	28.4	7.7	0.67		
	トマト	0	0	0	0	0	0	0	85.7	14.3		

表４　聞き書・主要果菜の用途―特徴的なもの

	カボチャ		ナス		キュウリ		トマト	
	検出地点数	東西比較	検出地点数	東西比較	検出地点数	東西比較	検出地点数	東西比較
生食					58	＝	18	＞＞
冷や汁					33	＝		
小豆煮	46	＞＞						
かて飯	34	＝						
粥・雑炊	50	＝						
かて計（その他を含み）	136	＝						
干しナス			22	＝				
漬け物			267	＝	273	＝		
金山寺味噌（ナス入り）			37	＝				
天王関連					12	＞＞		
七夕関連					19	＝	1	
盆関連			186	＝	234	＝	4	
冬至関連	82	＞＞						

（3）キュウリ

キュウリは和物と漬物が特徴的であって、通常加熱されることがない。和物ではキュウリもみが多く、漬物は塩漬け・糠漬け・粕漬け・味噌漬けなど広範囲にわたっている。

福島県須賀川市の「きゅうり天王祭」の例のように東日本では“天王”との結びつきが大きい。盆にはきゅうりもみなどで食されるのが大部分で、その他盆飾りになっている。

（4）トマト

トマトは、その他３地点で外国人のケチャップとピューレ、日本人のサラダであった。残り18地点では果物代わりの生食や盆飾りがすべてであって、その接し方にとまどいが認められる。

4．聞き書・主要果菜類の別名

取り上げた４種の果菜類、いずれも食生活と深く関連している野菜類であるので多様な別名の存在が予想されるが、思いの他に少ない。その理由として、いずれも日本原産ではなく歴史上に記載されている伝来ものであることが大きいと考えられる。原産と有史伝来では人々が接する時間は大きく異なっている。

分析結果を整理して表５と図１．２に示した。

表５　聞き書・カボチャ、ナス、トマトの別名

果実種類	別名	検出地点総数	検出比全平均	東西比較	帰属する別名
南瓜	全体	284	0.962	＝	
	とうなす	11	0.039	＝	とうなす
	なんきん	30	0.1	＜	なんきん、なんか、なんかん
	ぼうぶら	27	0.1	＜	ぼうぶら、ぼうふら、ぼぶら、ぼべら、ぼうぶな、ぼふら、ぼうらん、どふら
	その他	5	0.018		おかぼ、ひゆうが、ちょうせん、ゆうご
なす	全体	293	0.989	＝	
	なすび	95	0.322	＜＜	
トマト	全体	53	0.18	＝	
	赤なす	8	0.027	＝	

（１）カボチャ

他の果菜に較べてカボチャは別名が多い。その理由として、日本カボチャと西洋カボチャの２系統の存在が大きいものと考えられる。16世紀半ばに日本カボチャの源流が、19世紀半ばに西洋カボチャの源流が渡来したとされている。両者は外観も質もかなり異なっているので互いに別物と捉えられる可能性が強い。その上、栄養価値が高く保存性もあること、煮物やかてとして重要な役割を有していることなどから消費者との関わりが深くなるとともに新たな品種が生まれることなどで、自ら多くの名称が生まれたものと考えられる。

図１　カボチャの別名の分布地図
注　●：ぼうぶら群　○：なんきん群　★：とうなす群

（２）　ナス

ナスには、日本を東西に二分する東日本の「ナス」と西日本の「ナスビ」がある。図２から直感的に得られる分割ラインには、東西に分ける多数の事象が存在していることは周知のことである。ナス：ナスビもその重要な事例の一つになっている。

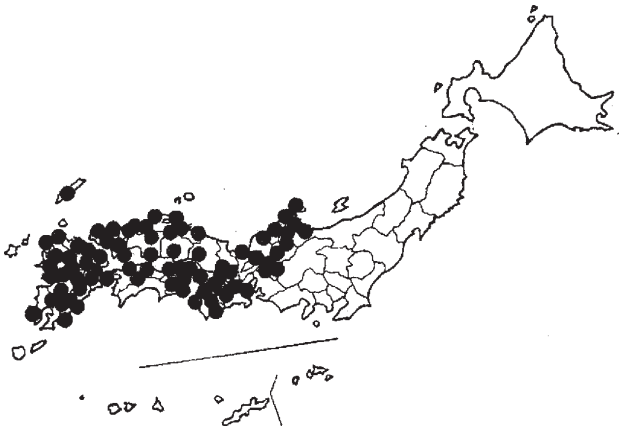

図２　ナスビの分布地図
注　●：なすび

（３）キュウリ

キュウリの渡来は極めて古く仏教伝来の頃とされているが、食用としての普及は江戸時代末期頃であるので比較的新しい。そのため別名が少ないものと考えられる。キュウリには別名といえるかどうか微妙な別名が２点、東京都多摩川上流の「きうり」、奈良県十津川郷の「うり」がある。その他の別名は認められない。

（４）トマト

トマトの伝来は17世紀初期であったが主に観賞用であった。食用としては19世紀半ばに始まるが、当初は「赤なす」と呼ばれ、その風味が敬遠されて評価はごく低かった。実際の普及は20世紀に入ってからとされている。この頃は聞き書が対象とした時代に相当し、まだ赤ナスが記憶に残っていることが図３の分布図から読みとることができる。

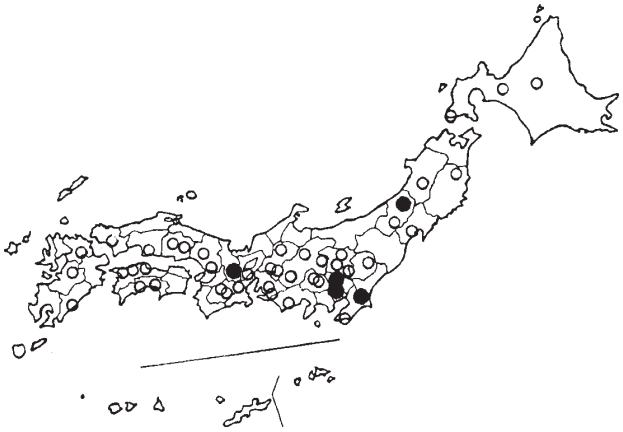

図３　トマトの分布地図
注　○：トマト　●：赤なす

5．現代における主要果菜類の消費と戦前との比較

表１と表６を比較した場合、最も強く感ずるのはいうまでもなくトマトの動きである。

戦前において、カボチャ、ナス、キュウリはほとんど差異がないのに対して、トマトはさておきキュウリの増加が大きい。その理由として、近年におけるサラダなどの生食の増加が考えられる。表３の用途ではキュウリはすべてが加熱なしで食されている。トマトも同様である。

表６　家計調査・主要果菜の消費

果菜種類	支出金額 円	比率 %	東西比較	購入数量 g	比率 %	東西比較
カボチャ	1496.93	10.52	＞＞	4301.88	15.14	＝
ナス	1929.25	13.55	＞＞	4344.16	15.29	＞
キュウリ	3203.46	22.51	＞＞	7746.06	27.25	＞＞
トマト	7603.27	53.42	＞＞	12028.90	42.32	＞＞

ま　と　め

１）肉類・イモ類・果物類について試みた聞き書の数量化法を果菜類（カボチャ・ナス・キュウリ・トマト）に適用し、その可能性を確認した。

２）約１世紀間の動きを、数量化した聞き書のデータと現代の家計調査データを比較することにより、著しい順位変動が認められた。

３）聞き書の時代は、丁度トマトの導入の最中であったので、その存在は最低であったが、今日ではその消費は断然のトップになっている。

４）聞き書の時代における果菜類の別名を検索し整理した。カボチャは多様な別名を有していた。

参　考　文　献

（１）編集委員会：聞き書・日本の食生活全集（アイヌ版１巻を除く各都道府県版47巻,索引２巻）,農文協（1982～1993）

（２）本間伸夫,立山千草：戦前における日本人の食肉嗜好を鶏肉が支えていた－「聞き書・日本の食生活全集」の記述データの数量化による解析－,新潟の生活文化,No.27,p.１～７,新潟県生活文化研究会（2021）

（３）本間伸夫,立山千草：戦前における日本人の食生活においてイモ類の主役は里芋であった－「聞き書・日本の食生活全集」の記述データの数量化による解析－,新潟の生活文化,No.28,p.５～８,新潟県生活文化研究会（2022）

（４）本間伸夫,立山千草：戦前の食生活において柿とミカンが主な果物だった－聞き書・日本の食生活全集」の数量化による解析－,新潟の生活文化,No.29,p.１～３,新潟県生活文化研究会（2023）

（５）総務省統計局：家計調査年報＜家計収支編＞平成26年（2014）,平成29年（2017）,令和１年（2019）,日本統計協会（2015～2020）